

# 対人援助学&心理学の縦横無尽 10



サトウタツヤ@立命館大学文学部心理学専攻

## 複線径路・等至性モデル、世界を駆ける (2)

2013年3月9～17日

TEMと言われて何のことだか分からない人は本誌の読者たる諸賢諸姉にはもういないと思うが、TEM(複線径路・等至性モデル (Trajectory equifinality model)のことである。ちなみに、Wikipediaを使うと透過型電子顕微鏡 (Transmission Electron Microscope; TEM)しか出てこない。TEMについて知りたい人は下記WEBサイトを参照してもらいたい。

<http://www.k2.dion.ne.jp/~kokoro/TEM/whatistem.html>

成書も既に二冊出ている。

複線径路・等至性モデルとは、システム論に基づく質的研究法の一つであり、研究者が研究したい現象を等至点として定め、その等至点に対する径路の多様性を描こうとするものである。おかげさまで国内外から関心をもってもらうことができおり本誌第8号において、2012年のイタリア、ブラジルでの講演について、「複線径路・等至性モデル、世界を駆ける」と題した活動記録を掲載させてもらった。

<http://www.humanservices.jp/magazine/vol8/16.pdf>

である。

そして、さらに幸いなことに2013年も、イタリア、デンマーク (以上3月)、イギリス (5月)でTEMについて話す機会を得ることができた。なお、どうでも良いことだが、2012年4月から研究部長という役職についており、海外に出かける日程もかなり慎重に決める必要があったと自分では思っている (本人比:感想には個人差があります)。

2013年3月9～13日

まずはイタリア・サレント大学で3年目となる講義。セルジオ・サルバトーレ教授のお招き。ご自宅にも呼んでもらったので、娘さんに折り紙（ナプキン）で兜を折ってあげたら奥様も大喜びで写真を撮っていた。



講義の内容については割愛。黒板を使ったのだが、変な物体が！サッカーのストッキング止めみたいなもの（懐かしい）。そして、いわゆる黒板消しが存在しない。



この物体でチョークを消すのでした。

講義の後は、セルジオがピザ屋につれていってくれたのだが、ピザがでかい！大きすぎるでしょ！という感じのピザでした。この一枚を二人で食べようというのだから、セルジオの注文感覚もよく分からない。

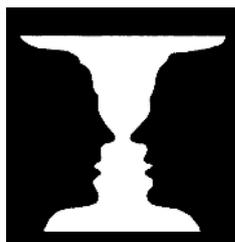


3 / 14からは、いよいよデンマーク。今回、初めてのデンマーク訪問。なぜデンマークなのか、と言えば、現在クラーク大学教授のヤーン・ヴァルシナー教授が、2013年9月からデンマーク・オールボー大学に異動するからなのであった。ヤーンといえば、2004年に立命館大学に特別訪問教授として講義をしてもらって以来、私のみならず多くの日本人心理学者がお世話になっている人である。何よりTEMの共同開発者でもある。オールボー大学はデンマークの北部、オールボーに本拠を置くが、このほか、首都コペンハーゲンなど合計3つのキャンパスをもっている。



ヤーンは、ニールス・ボーア記念・文化心理学センターの教授に就任することのこと。ニールス・ボーアは量子論に関する物理学者。相対性理論のアインシュタインの論敵であったことでも知られている。オールボー大学では、デンマークが生んだ偉大な物理学者の名を、文化心理学の講座名として冠することにしたのである。粋な話である。科学社会学では、人の名前をつけて顕彰することを冠名現象と呼ぶが、その例である。

ボーアは物理学において相補性の理論を提唱した。そして、このアイディアにはデンマークの心理学の影響が認められるのである。デンマークの心理学者？そんなのいたっけ？誰？と思う人が多いだろうが、ルビンの壺、と言われて知らない心理学徒はいないはずである。



ルビンの壺、のルビンは人名なのであった。これもまた、冠名現象である。彼は当初、

エビングハウスの無意味綴りのように、無意味図形を用いて研究していたが、得る物は無かった。試行錯誤の結果、いわゆる反転図形にたどり着いたのである。1915年に提出した博士論文[Visually experienced figures: Studies in psychological analysis. Part one]は、反転図形に基づいて書かれたものである。

先の反転図形は、横顔と花瓶が同時に見えることはない。黒い部分が地・背景となった場合には白い部分が図となる。そして、白い部分が地・背景となると黒い部分が図となる。我々の認識は決して、図だけを見ているのだけではなく、背景との相補的關係が必要なのである。ここでもまた相補性という語が出てきたが、そもそも、ボーアはこのアイディアを心理学から取り入れたようである。

そして、ニールス・ボーアとエドガー＝ルビンと一緒に写っている写真がある。どうやらこの2人はイトコ同士だったようなのである。心理学関係でイトコ同士というと、ダーウィンとゴルトンの2人がすぐに思い浮かぶが、ボーアとルビンイトコ同士で知的な切磋琢磨をしていたのかもしれない。



<http://www.kb.dk/images/billed/2010/okt/billeder/object73704/da/#>

さて、3月14日、私はTEM（複線径路等至性モデル）について講演を行った。日本のように、とりあえず聞いておいてあとで質問という形ではなく、話をしている途中にいろんな人がいろんなツッコミを入れてくるのでナカナカ進まなかった。写真上は私の講演の様子、下は討論者として参加したピナである。





次の写真は、この会を準備したオールボー大学のブラディ・ワゴナー（向かって右端）とその仲間達との写真である。その隣はイギリス・ワーウィック大学（University of Warwick）のエリック・ジェンセン。数理的な社会学者なのだが、妙に TEM のことを気に入ってくれて、院生の研究に使わせているとのことである。



3月15日はいよいよヤーン・ヴァルシナーの講演



文化心理学とその未来、と題して講演が行われた。

学術のことはさておき、デンマークの大学でびっくりしたことがいくつかある。

その一つは、学内のトイレが全て男女共用だったことである。あまりにびっくりしたせいか、写真をとるのを忘れてしまったが、王立美術館のトイレの写真がネット上にあったので拾ってみた。このように、トイレの横にはマーク、男女並んだマークが付けられており、どのトイレを誰が使ってもよいことになっている。いわゆる「男性小用」のトイレはどこにも存在しないのであった。



<http://blog.goo.ne.jp/mr-sakugen/e/24bca3235d0aafb7c356ca62097684ac>

飛行機のトイレや居酒屋のトイレなどは男女共用の場合があるのだから、私たち日本人にも全くなじみがないわけではないが、大学で男女共用というのはやはりぎょっとするのであった。

もう一つ、驚いたのは、大学教室内にビア・バーがあったことである。タンクトップのお嬢さんは大学生で、学生がビールを売ってくれているのである。



せっかくなので買って飲んでみた。



12デンマーククローネ。1クローネは30円ほど。なので少し高い(売上税が25%)。ただ、ホテルの自販機では30デンマーククローネだったので、確かに安い!のであった。

デンマーク写真の最後は夜空。左側真ん中にちょっと傷のように写っているのは実は三日月。分け合って7時過ぎに校舎の周りを歩いているときに見上げたら三日月が綺麗だったので撮ってみた、のである。



2013年5月21~25日 イギリス・ロンドン。

個性記述科学、という志向性がある。イタリア・サレント大学のセルジオ・サルバトーレ教授を中心に活動しているグループであり、既にネット上の年報の形で『Yearbook of Idiographic Science』雑誌も出している。

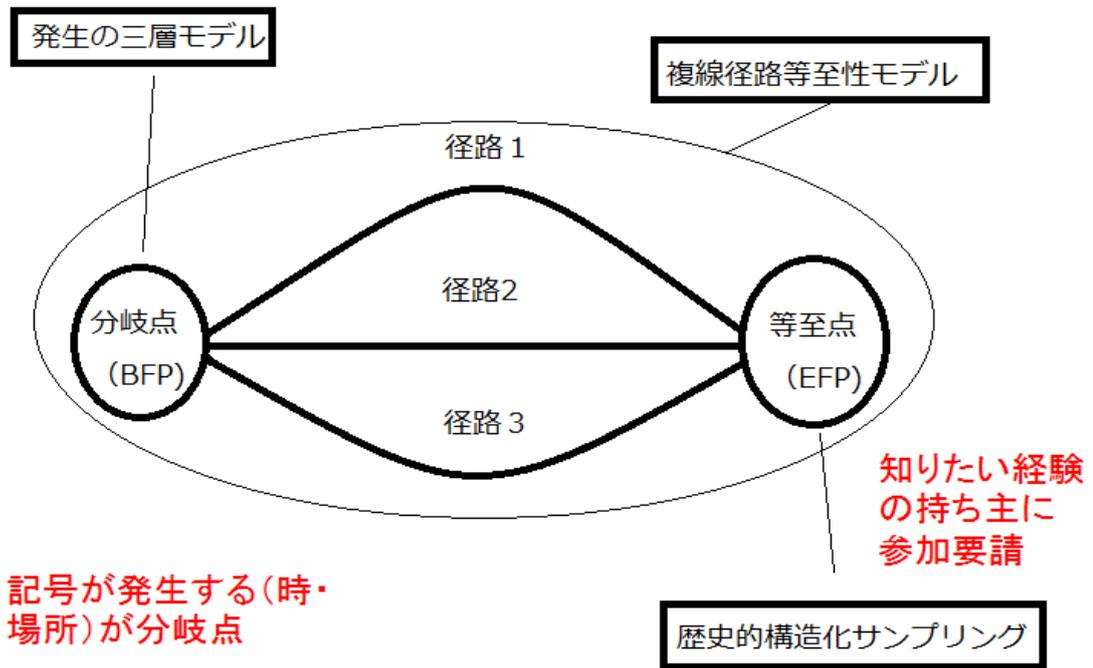
<http://www.infoagepub.com/index.php?id=11&s=s5021908d38a2b>

個性記述科学の仲間達は既に何度か、毎年一度の会合をもってきた。決して学会のような大規模な会ではなく、どちらかという人とづてで参加者を集める秘密結社的な会合で、参加者は全部30名弱程度である。

その会合が2013年はロンドンのLSEで行われた。LSE(ロンドン・スクールオブエコノミクス)は知る人ぞ知る社会科学系大学の雄である。心理学的介入の方法というサブタイトルであった。

私自身は「**Trajectory Equifinality Approach: Toward a Generalization and methodology in economic psychology**」というタイトルで発表を行った。TEM(複線径路等至性モデル)ではなくTEA(複線径路等至性アプローチ)に代えたところが少し新しい。

もともとTEM(複線径路等至性モデル)は人生経験を非可逆的時間と共に捉えようという記述モデルである。そのTEMと関連するサンプリング手法や自己理論が統合されてTEAとなっているのである。サンプリング手法としてのHSS(歴史的構造化サンプリング)は、研究の対象となる興味深い経験を実際にした人を研究対象者としてお招きするサンプリング手法である。また、TLMG(発生の三層モデル)は変容する自己を記述する理論である。



この TEA という枠組によって、ひとそれぞれ、様々な経験をモデル化し、一般的知識として蓄積できるというのが、今回の発表の核心であった。

夜、皆で街に繰り出した時に撮ったのが次の一枚。



さて、宿泊した Strand Hotel の近くにはトラファルガー広場がありナショナル・ギャラリー (National Gallery) <http://www.nationalgallery.org.uk/>があった。



1824年に設立された美術館で、13世紀半ばから1900年までの作品2,300点以上を所蔵している美術館である。そのコレクションは広く公開されており、特別な企画展示をのぞいて入館は無料となっている。

ただし、維持管理費用の一部を寄付でまかなうため、**Donation box** が入り口ほか数カ所に設けられている。



ガラスの板に印刷されているので分かりにくいのだが、「入場料無料。あなたの寄付が世界レベルのコレクションの維持に役立ちます」と書かれている。

海外の博物館は無料なのに日本の入場料は高すぎる！と憤っている人がいたりするのだが（前に新聞の投書で読んだことがある）、大英帝国系の博物館はたいてい無料＋寄付依頼が行われている。英語など読めない！と言わずに **Donation** という文字をみたら寄付しまし

ようね、みなさん。

さて、ナショナル・ギャラリーで見たかったものの一つが、ターナー (Joseph Mallord William Turner) の描いた「The Fighting Temeraire」という絵である。解体されるために最後の停泊地に曳かれてゆく戦艦テメレール号。



デジタル画像では雰囲気しか伝わらないが、ターナーは、現在でこそ印象派を先取りする作家として有名であるが、当時は、(印象派が印象的なほど酷いという意味だったのと同様)、よく分からない酷い絵であるという評価を受けていた。その絵は、闇と光を描くものであり、ゲーテの色彩論の影響を受けていると言われている。ゲーテの色彩論については以下の論考でも触れておいた。

サトウタツヤ 2007 心理学と科学の関係を考えるための若干の考察ーゲーテ『色彩論』を補助線に。てんむすフォーラム 第 2 号(2007)

[http://www.k2.dion.ne.jp/~kokoro/tenmus/2\\_31\\_40.pdf](http://www.k2.dion.ne.jp/~kokoro/tenmus/2_31_40.pdf)

というわけで、TEM を通じて、イタリア、デンマーク、イギリスと渡り歩くことができたのであった。2014 年は、再度ブラジルに行く予定である。